OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代の學問と懐徳堂
Author(s)	木村, 英一
Citation	懐徳. 1951, 22, p. 3-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90241
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代の學問と懐徳堂

木村英一

本日は懐徳堂を表章する講演會が開かれる事になりまして、私にも何かお話しするがよからうといふ事が先日教授會で決定いたしました。そこで私は及ばずながら喜んでお引受けした次第であります。懐徳堂が大阪の生んだ立派な文化的遺産であり、我國學術史の上でも大切なものである事については、少しも古い方はどなたもよく御存じでありますが、御專門の違つた方や若い方や學生諸君には、未だ充分御存じのない方も多からうと存じます。そこで今日はごく大まかに、平たくまた出來るだけ手みぢかに、懐徳堂とはどんなもので、どんな價値どんな意味があるかを申上げて見たいと思います。

それについて一寸突飛な樣ですが先づ一つの原理をお考へ置き願ひたいと思ひます。と言ひますのは懐徳堂の樣な古いものを今日こゝで表章する意味であります。一たい我々がお互に今日かうして生活して居りますが、この生活は、人類が發生して以來何萬年かの間に何百億とも知れない我々の祖先達の努力の上に築かれたものであります。太古から人類の祖先達は社會生活を營んで、それ相應に生産手段を生産する能力をもち、言語といふ思考手段と相互の意志疏通手段とをもつて居りました。その結果として他の動物には見られない事が人類史にはおこりました。即ち個人々々の經驗や知識が個人と共に消え失せないで社會共通の共有財産となつて集積され、それがゼネレーションからゼネレーションへと傳へられるにつれて、量は增加し質も次第に高まつて來る、同時にこれを活用する技術もだんだん進みました。か

うして人類の生活は次第に向上して、他の如何なる動物にも見られない文化生活を發達させて、終に今日に至つてゐるのであります。これが人類の特徴でありまして、決して他の動物の様に自然淘汰とか外界への適應とかに依つて受身の變化をするだけではないのであります。ですから例へば弓矢の發明は古代に於いては驚くべき工夫であつたでせうが、今では遙かに進んだものが出來て弓矢は殆んど實用價値を失つてゐる。ニユートンの引力の理論は天才の大發見に相違ないのですが、今では中學生でも習つて知つて居り、又物理學では更に進んだ理論が既に建てられてゐる。この様な自主的な改善進歩といふ事は、他の動物にはないことであり、人間に本質的な性格であります。この事から考へて今日我々はどの様に生活すべきであるかと申しますと、太古以來今日迄進んで來た文化の最も進んだ立場に立ち、最も高等な生活をするといふ特權をもちますと共に、是非ともその最も進んだ立場に立ち、そこから出發して、我々自身も亦出來るだけ文化を進歩させねばならない義務をもつて居ります。學問について云つても同じであります。學問と云つても色々ありますが、この事が最も直接な形であらはれてゐるのは自然科學や應用科學の方面であります。これ等の學問は、月々、否日々進歩してゐるのでありまして、――その進歩について行くだけでも中々忙しいのでありますが――、古くなつた理論はどしどし改めて行かねばならない、必要な事は、いつでもその最も進んだ先端に立つて仕事をする事であります。これは誰が考へてもよくわかります。ところが一方に一見これと反對に見える學問がある。即ち古い事をしらべる學問である歷史學があります。これは御存じの様に過去の事實の眞相を究めようとする學問でありまして、現代の生活を改善し進歩させようといふ意味での最も新しい立場の建設には直接關係いたしません。むしろ反對に、歷史時代は勿論のこと、更にその底をついて一層古い石器時代の研究をしたり、もつと古い原人の骨が出た等といつて大騒ぎをしてゐる、少しでも古い事を少しでも明かにしようとつとめて居ります。これは一體どういふ事でありませうか。私も支那の古い事をしらべてゐるものでありますが、時々それが何になるのかといふ様な遠慮のない御質問に接します。勿論そんなに單純な形で問はれる事は少いのでありますが、結局のところそういふ疑問を含んだ色々の形の御質問に接す

るのであります。しかし歴史學でもその方法や考へ方はやはり絶えず進歩してゐるのでありまして、學者はやはり、常に最も新しい進んだ立場に立たうとして居り、その點は自然科學等と少しも變りはありません。たゞ問題は何故今の生活改善に必ずしも役立たない様な古い事を對象にしてしらべるのかといふ點にあらうと思ひます。これはむつかしい問題になりますが、一應考へておくべき問題であります。

一たい我々が現在長い人類史の進行の先端に立つて、更に新しく文化を進歩させるべき地位に在る事は勿論でありますが、それをする爲めには、現在ある事實の眞相をよく理解して居らねばなりません。現在我々の目の前に色々の事がありますが、この事實の眞相はこれこれであつてかういふ意味でおくれてゐるからこれは價値が無いとか、この事實の眞相はこれこれであつてかういふ意味で進んでゐるからこれは價値があるとかいふ様に、事實の眞相を明かにするためには意味とか價値とかまで明かにならねば事實の眞相はわかりません。事實の眞相がわからなければ、それを改善するとか進歩させるとか言つても、どこをどうすれば進歩になるのか、價値があるのか、といふ事が見當がつかない筈であります。ところがこの事實の眞相といふものがなかなかむつかしいもので、容易にはわからないのであります。すべて事實といふものは結局現在でしかないものである、過去の事實といつても、現在に於ける、現在から見た過去の事實でしかあり得ない、——歴史學の對稱はこれなのでありますが——、廣い意味の現在の中に、過去・現在・未來がすべてあるのであります。しかも事實としてはつきり摑み得るものは、この現在に於ける過去の事實の外には無い、現在に於ける現在の事實は、まだ我々の努力によつて變化し得る様な可能性を含んでゐまして、まだはつきりした既定の形をもつてゐません。まして未來の事實——これも畢竟現在に於ける未來の事實に外なりませんが——は豫想以外にはありません。ですから現在のこの不定な事實の眞相や未來の豫想等をはつきり知らうとすれば、それが過去の如何なる事實から如何にして胚胎し、如何にして生じたものか、從つて如何なる意味をもつものか、又將來は如何に豫想されるかといふ様に、すべて過去の既定の事實を通して知る外はないのであります。歴史は事實の眞相を知らうとする學問である、

ですからいきほひ、既定の事實である過去の事實の究明に向ひます、――或は、歴史は事實の眞相を明める爲めの根柢である過去の事實を究明する學問である、といふ方がよいかもしれません――。して見れば、結局歴史は、事實の自覚であるといえるでありませう。事實を自覚して眞相を明らめてかゝらねば、我々の毎日の生活も、大地に足をふみしめた、意味あり價値あるものとならないのであります。決して歴史は單なる好奇心や滑稽趣味――これも人間持ち前の性質ですから適當に滿足させて當然ではありますが――だけにはつきないのであります。尤もかう申しましても、決して私はすべての人が歴史家にならねばならないと言ふのではありません。又歴史だけがすべてのもとであるといふのでもありません。人間の生活の複雑な營みは、分業によつてなされてゐるのでありますから、多くの人間の中には何人かの歴史家があつて、大きな見通しの上から事實の眞相や意味を明らめる仕事に專門にたづさはる事は必要な事である、そしてかゝる專門家は少くてよいとしても、その成果を認識する事こそは萬人に必要な事である、といつたのであります。懐徳堂は過去の大阪、更には日本の生んだ文化活動の一中心であり、過去の大阪文化を培つた立派な學校であります。そして今日では、また新しくその活動が始められようとしてゐます。そこでこの懐徳堂とはどういふものであり、又過去及び現在に於けるこの活動が、どういふ意味、どういふ價値をもつものであるか、を申上げることは決して徒爾ではなからうと思ひます。

一たい大阪がはじめて開けたのは、千數百年の昔に遡りますが、近世日本に於ける重要な大都會となつたのは、豐臣秀吉の頃から徳川時代へかけてであつて、三百五十年來の事であります。どういふ意味で重要な都會であつたかと言へば、勿論、經濟的都市、商賈の都として重要でありまして、江戸の様に幕府のお膝下といふわけでもなく、京都の様に公卿文化の古い傳統をもつ千年の古都であるといふわけでもない、明治以後の大阪が、經濟的な意味で日本の心臓、東亜の心臓であり、世界の大阪であつた事の素地は、夙に三百年來養はれてゐたのでありました。

さて大阪が大都會になつて以後、元和偃武以來、徳川時代になつて世の中が太平になり、その上幕府の學問奨勵があ

りました爲めに、日本中に少しづつ文化が發達し初めたのでありますが、しかしほんとうに文化の花が咲いたのは大體德川時代も中期に近い元祿時代（五代將軍綱吉）以後であります。そしてこの頃になりますと、江戸・京都・大阪といふ三大中心地には、それぞれ文化の上にも特色があらはれて來ます。卽ち大阪には、この頃より以後次第に天下の經濟を支配する樣になる町人階級が發達しまして、そこでは文化も亦直接間接、町人の力によつて養はれたものが多く、また町人の氣風に適つた風になつて行きます。例へば文學では近松の淨瑠璃、西鶴の小說の樣な平民的文學が出てゐる、一方上田秋成の小說の樣なものもある、國學では下河邊長流とか契仲何閑梨とか有賀長伯等の歌學があり、足利時代以來の傳統を破つた新研究が起つたり、或は從來は公卿ばかりがやつた樣な國學を町人が試みる風がおこつたりしてゐます。佛敎の學問では、葛城の慈雲尊者の律學や梵語學（『梵學津梁』一千卷を著す）が大阪の町人とどういふ關係をもつかは知りませんが、鐵眼和尙の有名な黃檗の一切經は、やはり町人の後援が與つてゐると思はれますし、『出定後語』を書いた天才的な學者富永仲基は、懷德堂を後援した道明寺屋吉左衞門（富永芳春）の子で、純然たる町人から出た學者であります。ところが更に、經濟人である町人自身で、同時に學問の出來る人が出ました。檀那衆には木村蒹葭堂があり、番頭さんには山片蟠桃（『夢の代』を著す）、鴻池の伊助と呼ばれた草間直方（『三貨圖彙』を著す）、蘭學をやつた橋本宗吉等であります。しかし何といつても、當時幕府が文敎政策のもととして奬勵したのは漢學でありまして、この漢學方面で大阪風の特色を出して、大阪文化の中心となり、日本の漢學史上に大きな足跡を印したのが懷德堂であります。尙ほこの外に大阪は、醫學の方面にも緖方洪庵の樣な大家を出して居ります。

さて懷德堂は享保九年（一七二四年、八代將軍吉宗の時）に三宅石菴先生を中心として創立された私立の學校であり、享保十一年に官許を得て半官立になりました。——ここで一言、今日の展觀品に關して申し上げておきますが、はじめ懷德堂の創立以前に、石菴先生の私塾に多松堂がありましたが、これはやがて移されます。その後享保九年に大火があつて、石菴先生も燒け出されて平野へ避難されましたが、平野には含翠堂といふ學校があり、石菴先生も何度か講義さ

れた事のあるゆかりの學校で、この關係者（七名家）が色々お世話しました。そのうち、石菴先生の門下が奮發して懷德堂を建てゝ、先生をここに迎へたのであります。今日含翠堂關係の遺物が多少陳列してありますのはこの關係であります。さてこの懷德堂の創立に貢獻されたのは、學者としては三宅石菴先生の弟子である中井甃菴先生で、この方が懷德堂の第二代の學主となられました。町人では懷德堂の五同志といはれる三星屋武右衞門（中村睦峰）・道明寺屋吉左衞門（富永德通卽ち芳春）・舟橋屋四郎右衞門（長崎克之）・備前屋吉兵衞（吉田盈枝）・鴻池又四郎（山中宗古）の五氏をはじめ、その他多くの方々であります。又中井甃菴先生の親友に五井蘭洲先生といふ立派な學者がありまして、この方が懷德堂の助敎として講義を助けられ、この方の學風が、懷德堂の學風を發展させる上に大きな貢獻をしてゐます。中井甃菴先生の子供で懷德堂の黃金時代を作られた中井竹山・中井履軒兩先生は實にこの五井蘭洲先生の弟子であります。

これより先き、大阪では懷德堂の創立以前に於いて、早くも寬永年間（一六三〇年代）に如竹散人（薩摩の文之和尙に學ぶ）がしばらく塾を開き、その後林羅山の門人一井鳳梧、五井蘭洲先生の父である大阪出身の五井持軒（四書屋加助）、伊藤仁齋の學をうけた中江岷山、等いふ方々が、早くて寬文（一六六〇年代）以來、晩くて寶永（一七〇〇年代）頃より各、弟子を取つて洪學を敎へて居られますが、懷德堂の創立以後は、大阪の洪學界に確乎たる中心が出來て、これから學問が大いに興つたのであります。

當時に於いては御存じの樣に洪學にも色々種類がありました。幕府が文敎の標準として奬勵したのは朱子學でありますが、別に近江の中江藤樹先生から始まつた陽明學、京都の伊藤仁齋先生から始まつた古學、江戶の荻生徂徠先生から始まつた古文辭學等が當時既に存在して居りました。これ等に對して懷德堂第一代の三宅石菴先生は虛心坦懷な人格者で、朱子・陸王・古學等の折衷學であつて（當時一部の人々から鵺學問だと言はれました）、實質的に身を修めて敎養を高めればよいといふ町人敎育には甚だ適して居りました。又懷德堂の規則は、平民敎育の本旨に添うた甚だ物わかりのよいもので、

一、學問は忠孝を盡し職業を勤むる等の上にこれ有る事に候、講釋も唯右の趣きを說きすゝむる義に候へば、書物持たざる人も聽聞くるしかるまじく候事。

但、叶はざる用事出で來り候はば、講釋半にも退出これ有るべく候。

一、武家方は上座なさるべき事、

但、講釋始まり候後出席候はゞ、其の差別これ有るまじく候。

一、（省略）　以上。

といふ調子であります。この「武家方は上座」のおきては、後に竹山先生の時に更に改められて、

一、書生の交は貴賤貧富を論ぜず、同輩と爲さるべき事、

但し大人小子之辨はこれ有る可く候、座席等は新舊長幼、學術の淺深を以つて面々推讓致さる可く候。

となつてゐます。これは階級制度のやかましかつた當時としては一異彩であります。さてこの三宅石菴先生の朱陸折衷の學風は、第二代の中井甃庵先生へ傳はりましたが、そこへ五井蘭洲先生の程朱學と詩文の學とが加はつて、この地盤の上に、竹山・履軒兩先生の獨創的な力量が加はり、ここに懷德堂は、學問の上で、天下に推しも推されもしない一流の大學校となつたのであります。

甃庵先生の歿後、三宅石菴先生の子奉樓先生が二十五年間學主をつとめられましたが、その歿後、學主をつがれたのが中井竹山先生であります。

竹山先生は人物も學問も立派で、詩文も上手であり、交際も廣く、その上史學に見識を有つて居られて、有名な『逸史』（德川家康一代の偉績を書く）といふ力作があり、又經世の材があつて、その抱負を書いた『草茅危言』の名著があります。なほ竹山先生一代の事業として特記すべきは、寛政四年（一七九二年）の大火に類燒した懷德堂を見事に再建されたことであります。

弟の履軒先生は、藝から竹山先生を助けつつ、自分は水哉館といふ私塾を開いて一生貧乏に暮し、晩年竹山の歿後、懐徳堂で講義されました。この方は兄竹山の様に交際は廣くなく、經營の材は見えませんでしたが、人物は清高で、學問は廣く、殊に經學に深くて、『七經逢原』・『七經雕題』・『七經雕題略』などいふ名著があります。日本の經學は中國の經學とは學風が同じでなく、一種獨特の風がありますが、經學といふ方面では、日本で一番すぐれた人といへば、先づ伊藤仁齋、荻生徂徠とこの中井履軒との三人をあげるべきでありませう。そしてこの三人にまたそれぞれの特色があります——經學の事については後に武内博士の御話があります——。また今日展觀しておきました履軒の著書の中に、『諸韻瑚璉』と『履軒古韻』とがあります。古書を正確に讀む必要から古韻の研究をした音韻學の書物であつて、少し後の靜岡の山梨稲川の古韻學と共に、獨創的な支那古韻學であります。また『深衣圖解』といふ本と紙製深衣とを出しておきましたが、これは深衣といふ昔の衣服の事が經書に載つて居りまして、履軒はそれが實際どんなものであるかを理解する爲めに、經書の記載によつて圖を書いて見、また實際に紙で作つて見て研究したのであります。尤もこの様な古韻學や名物學の實證的な研究は、中國ではこれより一〇〇年程前から次第に興つており、履軒の當時は恰も清朝の乾隆時代で中國の歷史上でも經學上の黄金時代であり、その精華の一部としてこの實證的な古韻學や名物學が盛んでありますが、それ等の研究は當時はまだ日本へは傳はつて來て居りません。履軒先生が獨創によつてそれと同じ立場に到達してゐられたのは偉いと思ひます。

竹山・履軒二先生の後は、竹山の子蕉園先生といふのが非常な天才でありましたのに惜しくも夭折せられ、第七子である碩果先生が懐徳堂をつがれました。履軒先生の水哉館の方は、履軒の子の柚園先生がうけつがれ、更にその子の桐園先生は、懐徳堂の碩果先生の養子となつて後をつがれましたので、ここに至つて懐徳堂と水哉館とは合併の形になりました。そしてこの時、桐園先生と協力して懐徳堂最後の經營に任じたのは、從兄の並河寒泉先生であります。——寒川の曾祖父並河天民は、その兄誠所と共に、伊藤仁齋・中村惕齋等から學をうけ、誠所は三宅石菴・中井甃菴と交際あ

り、懐徳堂に助講されたこともあります。そして寒泉の父尚誠の夫人（即ち寒泉の母）は、中井碩果の妹に當ります——。時恰も明治維新に遭遇し、社會狀勢も學問も一變しまして、さしもの懐徳堂も經營が困難となりましたので、明治二年（一八六九年）に至つて終に閉鎖されるに至りました。かくして享保九年以來一四六年（享保十一年以來一四四年）の傳統は、ここに一度絶えたのであります。今日の展觀の中に、閉鎖に當つて並河寒泉先生が校門に貼り付けられた悲壯な和歌が出てゐます。

百餘り四十路四年のふみの宿けふをかぎりと見かへりて出づ

以上が舊懐徳堂の大略でありますが、しかし大阪の漢學は、もとより舊懐徳堂だけにつきるものではありません。懐徳堂の最盛時である竹山・履軒の時代（明和・安永・天明、一七六〇・七〇・八〇年代）に越後の人片山北海を中心とする混沌社といふ詩社が結ばれ、多くの文人が集つて盛大をきわめ、懐徳堂と相並ぶ學問と文學との二大中心でありました。竹山先生もその社友の一人として應酬して居られます。その後幕末頃に、篠崎小竹・後藤松陰・廣瀬旭莊等いふ文人が大阪で活躍して居ります。その外、前後を通じて言へば、伊藤の古學派の學者では前述の中江帳山や並河天民があり、徂徠派の古文辭學系統には前に菅甘谷、後に藤澤東畡、山崎闇齋の學派には尼崎修齋、陽明學では大塩中齋等があり、多士濟々でありますが、何といつても懐徳堂が最大の中心でありました。

徳川氏三百年の鎖國時代は、恰もヨーロッパに近代科學が勃興した時代であり、この間に我日本が國を鎖して居た事は、我國が近代化に於いて大きな立ち後れをとらねばならぬことゝなりました。そして懐徳堂の盛時である竹山・履軒時代は、恰も英國の産業革命・アメリカの獨立戰爭（一七七六年）と同時であり、つゞいてあちらではフランス革命（一七八九年—）、ナポレオン時代（—一八一四年）と進んで來ます。かくしてこの頃から我國はますます世界の進運からとりのこされる運命におかれます。

それから約百年程經つて、明治維新によつてはじめてこの鎖國が解かれて、我國は新しい世界の空氣を呼吸いたしま

した。そして世界の進運に追ひつく爲めに懸命になつて歐米先進諸國の文明を學びはじめ、一時舊來の學術はかへり見られなくなりました。懐徳堂が經營出來なくなつたのも、當時としてはまことに已むを得ぬものがありました。それ以後御存じの如く大阪は、近代經濟都市として飛躍的な發展を遂げましたが、この近代大阪の發展の前提にかくれて、百四十年來懐徳堂その他によつて養はれた舊大阪文化があつたことは勿論であります。卽ち一面に於いて、新しい文化の發展は、古い地盤があつたからこそ可能であつたのであります。そこでその後四十年を經て明治の輝かしい時代が終らんとする頃、一應近代化した新日本の大阪に於いて、先覺者の間に舊大阪文化に對する自覺が芽生え、懐徳堂に對する追想が生じたのは、蓋し自然の數でありませう。かくて成立したのが、今日の財團法人懐徳堂記念會であります。

はじめ懐徳堂記念會は、明治四十三年(一九一〇年)に、西村天囚先生が、時の大阪府立圖書館長今井貫一氏の首唱によつて存在した大阪人文會の席上に於いて、「五井蘭洲先生の傳」を講演されたのがきつかけとなつたと聞いて居ります。その席上で、懐徳堂先賢師儒を公祭しようといふ議がおこり、多くの方々の贊同を得て懐徳堂記念會が同年成立、翌四十四年にはじめて記念講演會と先賢の遺書遺物の展觀とを催し、且、懐徳堂遺書十種の記念刊行が行はれました。そして四十五年に財團法人となり、永田仁助氏が理事長となられ、大正四年(一九一五年)に校舍を重建する事となつて、五年に竣工、松山直藏氏を最初の專任敎授にまねき、西村天囚氏も理事兼講師となられました。この前後より多くの方々の贊助を得、現在に至るまでの理事、顧問達の多大の御盡力がありまして、多くの學者を招いて、定日講義、文科講義、定期講演、通俗講演、講習會が間斷なく行はれて、戰爭中まで繼續したのであります。その間、校舍重建十周年に當る大正十五年に、書庫及研究室が建て增されました。昭和二十年三月十四日に、不幸にして戰災にかゝり、講堂と事務所は燒失、書庫だけは辛うじてのこりました。しかしこの不幸にも屈せず、七月には早くも書庫内研究室で開講式が擧げられ、竹山先生のいはゆる「仆而復興」といふ不撓の意氣が示されました。かくしてそれ以來不自由な中を、今日まで綿々として一部の講義が續けられてゐるのであります。

この明治四十三年の記念會成立以來今日まで四十年間（大正五年の校舍重建以來今年で三十四年になります）に於いて、懷德堂の事業の一部として、今日陳列してあります様な、色々の書物の刊行や、講演集・雜誌等の刊行がありました。又舊懷德堂や水哉館の遺書遺物については、その蒐集に力められ、特に昭和八年に中井家から四十七點を寄贈され、昭和十四年には同じく中井家から三百十五點を、伊藤家からは五十餘點を寄贈されまして、今では三百數十點に上つてゐます。又書籍については、集められた舊懷德堂・水哉館の遺書や次第に講入された新刊書の外に、大正十四年には、物故された西村碩園先生の舊藏書碩園文庫が寄贈され、昭和二十二年には講師であつた故大江文城氏の御遺族より藏書約二千二百冊を寄贈され、二十三年十二月には愛甲勇吉氏より藏書約六千八百冊を寄贈されて、總計三萬六千冊に及びました。そして二十四年の十二月に、これ等を擧げて阪大に寄附されたのであります。これは早くから懷德堂の顧問や理事の方々の間に於いてずつと將來を見通して、將來若し大阪に文科大學が出來た時にはそれを私せずして研究の資料として提供し、大きな立場に立つて學界に貢獻しようといふお考へが確立して居りまして、阪大に文學部が設置されると共に、之を實行にうつされたのであります。阪大ではこの御盛意を有り難くいたゞきまして、只今整理に從事して居り、將來これが管理に任じて大いに學界の爲めに有意義に活用したいと考へて居ります。もとより一阪大のものではなく、兼ねて大阪のものであり、日本のものであります。そしてそれと同時に、今や新しい時代に直面して、懷德堂の新しい活動が計畫されようとしてゐるのであります。

終戰によつて我國が世界の進運に立ちおくれてゐる事がはつきりと認識されました。從來一部の進步だけを見て、既に我國は世界文化の第一線にあると誤認した甘い考へ方に對してきびしく批判され、早く立ち上つて改めて歐米先進諸國から多くのことを學びとらねばならない、といふ氣持が一般に起つてゐます。これは勿論正しい事であり、さうしなければなりません。しかしその場合、我國古來のもの、更には東洋固有のものは、すべて封建的であるとして簡單に棄て去らうといふ單純な考へ方が相等強いのではないかと思ひます。もとより封建的なところは力めて改めねばなりませ

んが、しかし最初にも申しました様に、人間は祖先達が努力して積み上げてくれた土臺の上に立つて、その上に更につみ上げる事しか出來ないものである、それを一朝にして現代人だけの力ですつかりとりのぞいてやり直す等といふことは出來る筈のものではなく、またたとひ出來ても意味のない事であります。たとへば我々は、日本の歷史的地盤の上に立つて現代に處して行くより外に仕方がない、たとひ我々が日本固有のものを全部捨てゝアメリカを學ばうとしても、生れも育ちもちがふのですからとうてい充分には出來ません。又かりにそれが出來たとしても、その結果はこの地球上にアメリカが量的に增えたといふだけで、大した意味はありません。我々のなすべき事はおそらく外にあるでありませう。思ふにこゝ百年程の間に、交通機關が飛躍的に發展しまして、全地球上は完全に一つの世界となりました。しかし現に今米ソ二大勢力の對立があることだけから見ましても、まだ眞に安定した世界新秩序が出來てゐない事は明かであります。しかしかりに將來、眞に安定した世界新秩序が出來るとしますれば、それがどういふものになるかはもとより具體的にはわかりませんが、少くとも地球上にあるすべての文化の好さを——卽ち人類が今までに集積したあらゆる努力の成果を——少しも矛盾することなくすつかり綜合した秩序でなければならない、逆に言へば、さういふものでなければ、眞に安定した世界の新秩序であり得ない、といふことだけは言へるでありませう。

そこで考へますのに、我々のなすべき事は、固有のものをすつかりすてゝアメリカを學び、自らアメリカに成り切ることではない、またそれは出來ないことでもある。我々としてはむしろ一方では大いにアメリカに學ぶと共に、一方では日本固有、東洋固有の文化の好さをも大いに發揚して、それとこれとを調和させることである、——これはもとより大變むつかしい事ですが、しかし我々のみがなし得る特權であり、又我々の義務でもあります——。これが眞に我々が世界に貢獻する所以であつて、この外に道はありますまい。もとより東洋古來の文明であるインド・支那・日本等の文明が、そのまゝの形では現代の世界に有力であり得ない事は、こゝ百年程の間にすでに證明されてしまひました。ですからさういふ意味では東洋文化に戀着する必要はありません。たゞ東洋文明も亦人類のもつ貴い遺産の一つである——

古い財産形態をもつが大きな遺産であります――、これを決してすてゝはなりません。由來遺産は棄てたり喰ひつぶしたりすべきものではなく活用すべきものである、實際また、東洋文明といふ遺産は、今では喰ひつぶすには、大して足しになりません。思ふに父祖の遺産を十二分に活用するといふことは、大變むつかしい事であつて、その財産を作つた父祖と同じ位の力量が要るものであります。まことにゲーテの言つた如く、すべて遺産は、これを再び贏ち得なければならない」のであります。これが我々が東洋の文化財に對すべき態度であります。懷德堂は我が大阪における貴重な文化的遺産でありまして、我々は決してこれをむざむざと棄てたり喰ひつぶしたりしてはならない、正當に保存して大いに活用しなければなりません。本日懷德堂を表章する講演會が開かれたのもこの爲めであり、今や懷德堂の文化活動が再びはじめられようとしてゐるのも、この線に沿うてゞあります。

これから引き續いて、藤敎授と武内博士との御講演がありますが、私はその前座をつとめる意味をも兼ねて、ここに懷德堂とはどういふものかを簡單に御紹介した次第であります。